

人口減少社会日本における伝統宗教の現況と課題

—高知県下の過疎地域を事例に—

Current situation and Problems of traditional religion in the decreasing population society Japan.

In case the depopulated area of Kochi Prefecture

冬月 律 (麗澤大学)

FUYUTSUKI, Ritsu (Reitaku University)

rfuyutsu@reitaku-u.ac.jp

戦後の社会変動に伴う問題に、人口流動による過疎化問題があげられる。過疎化の影響は、我が国の宗教的伝統文化にまで及んでいる。とくに、神社神道と伝統仏教は地域社会と密接な関わりをもっており、地域住民とのつながりが大事とされる傾向にある。

本報告では、典型的な過疎地域として高知県、伝統宗教では神社神道に限定し、地域の過疎状況と過疎化にともなう神社の外部条件の変容の一端を筆者の調査結果から概観し、過疎問題が如何に地域と神社(神道)に影響を与えているのかについて考察する。また、このような、地域の過疎化によって様々な問題に直面している神社の状況を把握し、地域の信仰生活にどのような影響を及ぼしているかを究明することは、現代の宗教生活を理解するうえで重要な課題であると考えられる。

高知県は過疎地域を多く抱えており、とりわけ少子高齢化が進んだ集落の維持可能性が現在問われている。今回の調査対象地である(旧)窪川町(現四万十町、平成22年現在人口は12,963人)は、7つの地区(約180集落を包括する概念としての地区)で形成されており、昭和35年から平成22年までの人口減少率は47.8%、高齢者率は36.5%である。

人口減少は、県内外への出稼ぎの影響がもっとも顕著に現れた昭和40年から45年の間に社会減が起これ、この間にすでに25%の人口が減少している。現在は、それほど大きな社会減はない。しかし、急速な高齢化の進行によって、世帯数の多い集落が減少し、世帯数の少ない集落が増加しており、それに伴って高齢化率の高い集落ほど、世帯数の少ない集落が多く、人口減少率も高くなっており、今後は自然減が増加することが予想されている。

一方、窪川町の各集落には古くから氏神様として祀られている神社(お宮)が103(宗教法人のみ)あり、すべての神社は、集落や氏子単位で管理され、そのような神社関係者とともに毎年の祭りが執り行われてきた。報告者による平成24年の実態調査と27年の追跡調査で、これまでに氏子がおらず、神社の祭りが中止となった集落は存在していないことが判明した。しかし、少子高齢化の進行具合とそれに比例し、毎年の祭礼行事が形骸化している(との懸念も含め)神社が増加傾向にあり、近い将来、そのような問題がさらに顕在化する可能性が高まっていることから、早急の対策が必要であることが明らかになった。

今後は、過疎集落と神社が抱える諸問題の全体像をより明らかにするための継続した実態調査(量的・質的)のほかに、どのような対策が考えられるかについても考察したい。